

## マスターズを彩るレジェンドたち(12)

暦のうえでは7月。大暑の季節だ。冷や奴か冷や麦、または冷やそうめんが口に合う時候となった。新型コロナウイルスの影響でマスターズの活動はまだまだ。だが、地域によっては景気のいい話もある。昨年の深秋に佐賀県の岩永義次さんがM60クラスの3000m、5000m、10000mでそれぞれ世界新を。また、青森県ではM90クラスの4×400mリレーでこちらも世界新を高らかに響かせた。今月号はこの話題をテーマにした。

写真／岩永義次さん、日本マスターズ連合

### 中・長距離三冠の王者 岩永義次さん(61歳・佐賀)

「きょうこそ悔しさを晴らすぞ」。こう自分自身に言い聞かせてスタートを切ったM60・3000m。天候もまずまず。気合いに満ちた岩永義次さん(佐賀)のレース運びは確かで、目標だった日本記録どころか、同クラスの世界新となる9分21秒38でフィニッシュした。「やった。よかった!」が岩永さんの口をついて出た。「最低でも日本新」が目標だったのだが、世界新までとは。

悔しさを晴らすとは、2020年8月8日にあった同じ佐賀長距離記録会の3000mでのこと。高校生や一般の競技者に交じって、マスターズの岩永さんが一緒に走った。

この競技会でも岩永さんは燃えていた。結果は9分48秒56。日本記録の9分56秒67を18年ぶりに破る好タイムだが、手続きの手違いから非公認となってしまった。「悔しかったですね」という気持ちはよく分かる。そこで再度の挑戦となったのが、佐賀市内のサンライズ競技場で行われた、先の2020年9月26日の長距離記録会だった。

日本記録より上の9分29秒47の世界記録(2020年6月現在)まで上回り、「ようし、次のレースでも」とさらなる闘志をかき立てた岩永さんは、M60・5000mでも日本記録、世界記録をしのぎ、15分56秒41で走ったのだ。ちなみに従来の日本記録は16分52秒4(手動)、世界記録が16分12秒57(前項同)。岩永さんの記録の樹

立日は11月14日。

「このときも走りやすいコンディションでした。私の目標は“世界の壁”といわれた16分を破ることだった。15分台で走れたことは感慨深かった。見ている人は『16分は切れんだろう』の声ばかり。それならとより燃えて」と話す。

次は同年11月28日。同じ記録会のM60・10000mで3回目の快挙をやったのけた。このレースでも高校生たちに交じって走り、岩永さんは一人ぼっちで、トラックを25周した。タイムは33分39秒52だ。またまた日本記録の35分45秒52、世界記録33分57秒6(前項同)を破った。それぞれ18年ぶり、3年ぶりの更新。

「記録は出しましたが、納得はしていません。準備期間がもう少し欲しかった。しっかり準備しておけば、タイムはあと何秒か縮められたはず」がレース後の言葉だった。

### 練習は毎日20km M65でも世界記録を狙う

記録更新三冠の岩永さんは全国的に知られた“有田焼”の町、佐賀県有田町で生まれ、育った。地元の有田工高に入学後、陸上を始め、長距離で県内3位の実績はあるが、ビッグレースの実力はなかった。卒業して社会人となり、21歳のときに佐賀代表として国体や当時あった九州一周駅伝に出た。

5年目には福岡国際マラソンで2時間17分台で走ったこともある。その後、23歳で誘いがあって埼玉の自衛



岩永義次さん(61歳・佐賀)

隊体育学校へ。6年間在籍した後、ある実業団にコーチ兼選手として入社し、1986年の北京国際マラソンに日本代表として出場した。

「成績はさっぱりでした。足を痛めていて」。この後も故障続きで、左右のヒザの手術を5年間で3回したという。35歳頃に故郷の有田町に帰郷し、そこで再度勤め始めた。41歳頃だったか、書店で「陸上競技マガジン」を手にしたとき、マスターズ陸上のことを知った。

「これは面白い。中・高齢者を対象にした陸上で、5歳刻みで記録を競い合う。実に楽しそうだ」と、マスターズへ入会した。45歳で競技会に出て、

M50・5000mで15分20秒台を出した。「すごいな」の声が上がったのだが、これまた公認ならず。

「それなら」と46歳で長距離記録会の5000mに出場し、14分57秒台と15分の厚い壁を突破したのだが、こちらでも未公認とされた。岩永さんの家族は妻と大学1年生の長男の3人。現在も施設に勤めているが、練習は毎日。勤めが終わった後、ロードか農道を走る。「そうですね。今は日に20kmぐらいかな。世界記録を出す前は30kmをこなしていました」。練習が終わり、帰宅する頃は夜の9時前あたり。それからシャワーで汗を流し、食事を済ますと身体のケアをし、筋力トレまで。7月で61歳になる岩永さんは今後の目標を「自己記録を目指し、65歳になればM65クラスで世界記録を狙います」と語る。

この岩永さんについて、佐賀マスターズ陸上連盟の山田清美理事長は「競技に取り組む姿勢は素晴らしいし、そのうえ厳しい。例えば駅伝の場合など、岩永さんを見習い、ほかのメンバーも自重してレースに備えています」と話している。

### “津軽長寿”のカルテット M90・4×400mRで世界新樹立

青森マスターズのM90カルテットが快挙を達成した。

令和3(2021)年5月23日、青森県六ヶ所村大石総合運動公園陸上競技場で行われた第5回青森マスターズ陸上競技記録会のM90(90～94歳)4×400mRで、8分49秒01の世界新記録を打ち立てた(※)。世界記録は12分41秒69(2020年6月現在)で、約4分弱も短縮し、7年ぶりに更新した。

日本マスターズの4×400mRの最高齢者クラスはM80どまりで、その上はない。今回の世界新はM85を飛ばしてのM90の創設日本記録となる。世界新の輝くレコードを出したメンバーは次の通り。

1走から敦賀又四郎さん(91歳)

=五所川原市、工藤勇蔵さん(92歳)  
=同、三ツ谷光造さん(90歳)=鯉ヶ沢町、田中博男さん(90歳)=青森市である。

走る前に「世界記録の12分台に劣らないように、12分以内でいこう」と誓い合っていた。当日の気温は13度とヒヤッとした温度だったが、会場の会員のみなさんから拍手で送り出され、カルテットは持てる力を存分に発揮した。結果は8分49秒01のお見事な世界新だ。

「大変な記録が出せてうれしい。目標達成で感無量です」と口をそろえた。アンカーの田中さんは「みんな練習の成果を見せてくれた。練習でそれぞれ400mで3分を切っていたので、目標の12分台は確実。世界新も出せると思っていました。実現できてホッとしています」と話した。

### 田中さんの思惑 「短命県青森」の返上

“津軽長寿”のチームを实らせたのは田中さんの呼び掛けによるものだったのだ。その構想はマイルリレーで長寿チームが頑張りを見せれば「年齢が高くても“やればやれる”を証明することになり『短命県青森の返上』につながるのでは」と考えたから。

田中さんが構想実現に向け動いたのは5年前だった。当初は85～89歳2人、90歳代2人によるM85チームでの参戦構想である。マスターズ対象者を調査し、リレーに参加要請のうえ、レース参戦の好機を待った。チャンスが訪れたのは、2018年10月13日の青森マスターズ記録会だったが、台風19号の直撃を受け記録会は中止となった。「十分に世界新のチーム力はあったと思っていたのに残念でした」と田中さん。そのときのメンバーは敦賀、工藤、田中さんの3人に1人を加えた陣容だった。

M90クラスのリレーメンバーの顔触れだったが、1走の敦賀さんと2走の工藤さんは青森各地のロードレースで最



田中博男さん(90歳・青森)

高齢参加者として参戦、好成績を残している。3走の三ツ谷さんは同県マスターズの古参ランナー。同県内のマラソン大会に参加しては「レース後のくつろぎが楽しい」を口にし、昨年リレーメンバーに加わった。

新型コロナウイルスの影響で春からの合同練習の時間が取れなかったが、その間、田中さんが各人に練習メニューを送り届け、アドバイスした。田中さんを除くランナーのレース本番後の一言を。

敦賀さん「(世界新を出して)すがすがしい気分。年齢を重ねるたびに身体が丈夫になってきて(笑い)」

工藤さん「このタイムを出したことで青森の短命県返上につながれば。私たちに続く人たちも頑張ってもらいたい」

三ツ谷さん「私に助言してくれた3人のおかげ。私がお荷物にならないように懸命に走りました(謙虚に)」

“津軽の長寿ヒーロー”のカルテットは8月29日に弘前市である青森マスターズの選手権大会で「今度はM90・4×100mRに臨み、再び世界新を」と張り切っている。

(この項次号に続く)

(※)世界新として公認されるかは現在審議中。